命のとなりで

園長　野中　泉

今年度の最後のアトムっ子の巻頭文をどうしても書けずにいます。正確には、何度も書いて、何度もこれではダメだとボツにしています。

2 月 24 日、あまりに思いがけず、とても突然に戦争がはじまってしまいました。世界中の人たちが 3 年にも及ぶ長い日々を必死で未知のウィルスと対峙し、ひとりでも多くの『命』を救う懸命な努力を続けてきたその最中に、たったひとりの独裁者が放った爆撃弾がいとも簡単に街を破壊してしまいました。唐突に流れてきたその映像に言葉を失い、そして、そのまま、今もまだ何を語ればよいのかわからずにいます。

あの爆撃の空の下には、赤ん坊を抱くお母さんもいたでしょう。家族のために一生懸命働くお父さんもいたでしょう。アトムの子どもたちのように、泣いたり、笑ったり、けんかしたり、仲直りしたりの子どもたちの当たり前の日常が繰り広げられていたことでしょう。私たちがコロナ禍の保育園で、必死でつないできた毎日と重ねて、悔しくて悲しくて、やりきれない気持ちが溢れます。

そんな中、ずいぶん前に読んだ黒柳徹子さんの文章を思い出しました。長年ユネスコ親善大使として多くの戦火の子どもたちにも出会ってきた彼女の日本の子どもたちへのメッセージが、今改めて胸に響きます。少し長いのですが、原文を引用させていただき、みなさんと「命」のことを考え続けてきた今年度の、最後のメッセージにかえさせてください。

私が会った子どもたちは、 みんな可愛かった。 笑っている子ども、 ふざけている子ども、
赤ちゃんを、おんぶした女の子、 さかだちを自慢そうに　見せてくれた男の子、
いっしょにうたった子ども、 どこまでも、ついてきた子ども。 いろんな子どもたちに、会った。
そして両親や姉兄を　目の前で殺された子ども、 ゲリラに腕や足を　切り取られた子ども、
親が蒸発し、小さい弟や妹を残された女の子、 親友だった家畜が、飢えて　死んでしまいぼう然としていた男の子、
家も学校も、すべて破壊されてしまった子ども、 難民キャンプを、たらいまわしにされている孤児たち、
家族を養うために売春する子ども。 だけど、だけど、そんな、ひどい状況のなかで、
自殺をした子どもは、一人もいない、と聞いた。 希望も何もない難民キャンプでも一人も、いない、と。
私は、ほうぼうで聞いて歩いた。「自殺をした子は、いませんか？」「一人も、いないのです」
私は、骨が見えるくらい痩せて　骸骨のようになりながらも一生懸命に歩いている子を　見ながら一人で泣いた。
『日本では、子どもが、 自殺してるんです。』大きい声で叫びたかった。 こんな悲しいことが、あるでしょうか。
豊かさとは、なんなの？　私がいろんな子どもに会って　日本の子どもに伝えたかったこと。
それは、もし、この発展途上国の　子どもたちを、「可哀想」と思うなら、「助けてあげたい」と思うなら、
いま、あなたの隣にいる友達と「いっしょにやっていこうよ」と話して。「みんなで、いっしょに生きていこう」 と、手をつないで。
私の小学校、トットちゃんの学校には 体の不自由な子が何人もいた。
私のいちばんの仲良しは ポリオ（小児マヒ）の男の子だった。
校長先生は、一度もそういう子どもたちを「助けてあげなさい」とか「手をかしてあげなさい。」とか、いわなかった。
いつも、いったことは、「みんないっしょだよ。 いっしょにやるんだよ」それだけだった。
だから私たちは、なんでもいっしょにやった。 誰だって友だちがほしい。 肩を組んでいっしょに笑いたい。
飢えてる子どもだって、日本の子どもと 友だちになりたい、と思ってるんですから。
これが、みなさんに、私が伝えたかったことです。

～引用：黒柳徹子著 『トットちゃんとトットちゃんたち』/講談社より～